

私の戦争体験

第36集

おじいさんや
おばあさんが
体験した
大切な大切な
お話の数々。

戦災・罹災者の想い p2

戦争体験 p3

私の戦争体験の思い出 p4

神戸の大空襲 p6

私の戦争体験記 p7

台湾行き還り p8

戦争体験 p10

私の戦争体験・第35集 アンケートまとめ p13

〔レポート〕戦争を語り継ぐ会 p14

お聞かせください! あなたの〈声〉 p15

〈キリトリ線〉

5 あなたのお住まいの地域で「戦争体験を語り継ぐ会」が開催されれば、参加したいと思いますか？ (イ) はい (ロ) いいえ

6 戦争体験者は、高齢となり自分で書かれるのは、困難な方も多いと聞きます。あなたは、そのみなさまの戦争体験を聞いて、原稿を書くボランティアがあれば、参加したいと思いますか？ (イ) はい (ロ) いいえ

7 あなたのほかに「私の戦争体験」を読まれた方はおられますか？

(イ) いる (ロ) いない

●それはどなたですか？ (イ) 配偶者 (ロ) 子ども (ハ) 孫 (ニ) 友人 (ホ) その他
読まれた方の感想があればお聞かせください。

8 「私の戦争体験」〈36集〉をお読みになってのご感想をお聞かせください。

9 最近、平和について考えたことを教えてください。

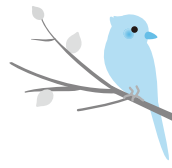
●これを読んでくれた子どもたちにお聞きします

10 お父さんやお母さん、おじいちゃんやおばあちゃんから戦争体験を聞いたことがありますか。 (イ) ある (ロ) ない

11 「ある」とお答えの方にお聞きします。聞いた体験談をご家族やお友達に話したことがありますか。 (イ) ある (ロ) ない

ご協力ありがとうございました。

大阪いずみ市民生活協同組合



戦災・罹災者の想い

堺市 福山 義人(84歳)

私は昭和4年12月に大阪泉南で生まれ、幼稚園から中学までは、堺の鳳という所に住んでいました。鳳小学校6年生の時、大東亜戦争(のちに第二次世界大戦といわれた)が勃発し鳳中学校(現鳳高校)に進学しましたが、1年生2年生の頃は世の中も割と平穏でした。その後、日までに食糧や衣類が不足しだし、学校へ行っても授業は殆ど無く、あっても教練と称して配属将校がやってきて、制服制帽・足にはゲートルを巻き、三八銃を肩に担いで、軍事訓練を受けました。行動が緩慢であったり、失敗を一人でもすると全体責任として、全員横一列に並ばされ平手打ちのビンタを食らわされるのが平常でした。学校生活は楽しい思いも全くないままに戦況が次第に悪化するに従い、授業はほとんどなく勤務奉仕として泉南にある飛行場の堰堤づくりや近くの軍需工場で機械と向き合う毎日が続きました。

昭和19年から20年にかけて戦争はまさに熾烈を極め、サイパン島・グアム島・硫黄島の玉砕、沖繩へのアメリカ海兵隊の進行で戦局は一気に劣勢に転じる事になり、制空権・制海権も失い国土も連日連夜の空襲で焼土化していききました。

学校から家に帰っても、両親・姉妹の5人家族が身を潜め、夜になると灯火管制のもと、僅かな光を求めて不安な夜を過ごし着る物も少なく、飢えに苦しみ食べられるものは、何でも口にしました。母は僅かな食料を求めて、自分の着物を米に代えるためあちこちを駆け回っていました。そして平和であった家庭がある日、突然、奈落のどん底に突き落とされました。それは、昭和20年7月10日の夜、和歌山・堺を襲った大空襲でした。当日、唯一の情報はラジオで、そのラジオから、空襲警報発令だいまB29の編隊が潮岬南方海上250キロを北上中この放送を聞いて、これは大変なことになると思われせました。このコースだと紀伊水道を北上して大阪湾周辺都市が危険にさらされると思いました。でも自分たちの家

は市街地ではなく、比較的人口の少ない住宅地だからそう心配しなくてもいいと思っていた。それが間違いのもと、B29の爆音を間近に聞き恐れおののいていたら、突然まわりや空が真っ赤に染まり、ものすごい音と共に、油脂焼夷弾が雨あられのごとく降り注いできました。急いで家族が手を取り合って火の手が上がる中を、必死に前の空き地に逃げました。目の前で長年住んでいた家が無残にいつも簡単に焼け落ちるのを、何ひとつ持ち出す間もなく着の身着のまま、ただ茫然と恐怖と失意の様子で立ちすくんでいました。一夜明け防空壕からでると、あたり一面、焼け野原のあちらこちらに焼夷弾の弾筒が地面にめり込んでいたのが、今でも脳裡に焼き付いています。

もう1ヶ月あまり、戦争が早く終わっていたら私たちの人生もまた違ったものになっていたかもしれない。いずれにしても世界で唯一の核被爆国である日本に生まれて、戦前・戦中・戦後の混乱期をなんとか生きながらえて、今日、平和な日を送れていることを夢の様に思い、争いのない世界平和は、すべての人にとって永遠の願いだと痛感しています。

戦争体験

東大阪市 松本 孝次(88歳)

あの忌まわしい、第二次大戦が終わってから(昭和20年8月15日終戦)、日本にとっては敗戦、それより早や66年余りの歳月が経ちました。あの戦争で例え勝っても大変なこと。まして負けたのですから、それははじめで大変つらい年月でした。長い間、領土は連合軍におさえられ、大変つらくみじめな戦後生活が、10年、20年ほど続きました。

ようやく平和条約が結ばれ、「日本」もなんとか列国並みの扱いが受けられるようになりました。それまでは、多くの日本国民が大変な思いをして、今日まで至りました。戦争は二度

配属将校

大正14年(1925)公布の陸軍現役将校学校配属令により、全国の中等学校以上の学校に配置された旧日本陸軍の現役将校のこと。

三八銃

明治38年に大日本帝国陸軍が開発、採用した単発式の小銃。

堰堤

貯水・治水・砂防などの目的で、川水を他に引いたり、流れを緩やかにしたり、河川・溪谷を横断してつくられる堤防。ダムより小規模。

灯火管制

夜間、空襲に備え、電灯、ロースク等の照明を消したり制限したり、覆って光がもれないようにすること。それにより、敵が状況を把握することを防ぎ、夜間空襲や夜間砲撃などの目標となることをなるべく防ぐことを目的としている。

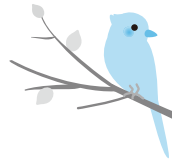
油脂焼夷弾

焼夷剤に、ゼリー状にしたガソリンを主成分とするものを用いた焼夷弾。

核被爆国

原子爆弾、水素爆弾などの核兵器の投下による被害を受けた国のこと。戦争において、日本は唯一の核被爆国。





としてはいけません。

今の内に皆でもう一度考えてみましょうね!!

勝った国はともかく、負けた方々はそれはそれはみじめです。絶対に二度と戦争はいやです。やってはいけません。同胞諸氏が遠く外地で戦死戦傷など、行方不明になり、「生きて祖国」に帰った方々はまだしも幸せ、お骨も上がらず、今まだ外地で野ざらしになっておられる方々は、沢山おられることでしょう。合掌。

小生の生まれは、大正15年8月生まれ、8歳です。日本が終戦を迎えた折、小生は20歳の若者でした。幸いと云うか、不幸と云うか、招集応召にならず、別に志願兵も行かず、軍需工場で終戦を迎えました。内地は、終戦近くになりますと(サイパン陥落)、当然ながら毎日、空襲は激しくなりました。「住むところなく、食べる物なく、着る物も満足になくただ耐え忍ぶ毎日でした」今の世の中は、本当に結構きわまりのない世の中になりました。かえって物の有難みは忘れていた様です。「ご主人さん、息子さん、お孫さん」などを絶対に戦争で失うことの無い様に、心から願うものであります。

今の平和をいつまでも大切に守っていただける様に、国民全員で努力協力していこうではありませんか……。

日本のためにも、我ら人類のためにも、平和、平和を願うのみです。

私の戦争体験の思い出

堺市 澤田 芳子(79歳)

昭和16年4月国民学校になって最初の生徒で、教科書の国語に「さいたさいた桜が咲いた」から「あかいあかいあさい」になり、音楽の「白地に赤く」から「青空高く」に変わって、ドレミ

も「はにほへといろは」の音階だった。シンガポール陥落で、日の丸のマークが入ったボールを一個ずつ学校でもらった。朝早くから近所の人が兵隊さんを出征兵士を送るので、町会長や陸軍の兵隊さん達で送る姿、エプロンをかけた婦人会のおばさん達が忙しそうにしていた。子どもなので万歳万歳と言って見送ったり、難波の久保田鉄工所の近くの家は、強制的に避難するために家をつぶしていたが、4年生以上は親戚が集団疎開のどちらかに行く事になったのは昭和19年の事で、その間アツク島玉砕又硫黄島沖縄と玉砕と言われても負けたなんて誰も言ってくれないし、日本は神風が吹くのやと誰もが言っていたので、早く吹いたらよいのにと思っていた。英霊を迎えに小学生は御堂筋の両方西と東に並らんだり、昭和20年3月14日の卒業式集団疎開から帰る卒業生のために、残留組が身体が悪くて疎開できなかった子が蛍の光りの練習をしていたその前日13日の空襲で卒業生を送る所が、焼夷弾の為に難波付近は火の海になった。消防団の人がメガホンで高島屋に避難してくださいと言ったが、ヒューーと一音と瓦の割れる音、子どもながら安全な所をよりながら高島屋につき、地下鉄の切符売り場の近くにいった。土の丸太のようになった焼けた死体も、死んでいる子をおんぶして「ねんねこ」を着ている女の人も泣いてなんかいらなかったのだろうか!!下の冷たい所で座っていたけど、学校の友達・近所の人と居るのが唯一心のささえた。でもそれから外へ出たらもう焼野原で雨が降っていた。水もなく食べ物も地区の学校に行っておにぎりをもらったそうだが、現在の堺まで歩いて家族5人無事ついた時はうれしかった。3月から5月まで行く学校がなく町の中の学校は入れなかった。播州赤穂の学校に行っても田植、麦かり。田舎の学校に行ったときは、随分淋しかった。最初の内はお客様だったけど、都会の子は何も知らんと言われ口惜しい思いだった。戦争なんで何のためにするのかと思った。戦争がすんで玉音放送も何の事かわからない口語文でお話してほしい。私たちは戦争ですごいダメージを受けている。無意味な戦争なんて絶対しないしてほしいと思う。皆が幸せになります様に。

同胞諸氏
自身と同じ国民や民族、また、同じ主義主張を持った仲間たち大勢のこと。敬意を込めている言葉。

集団疎開

戦況の悪化に伴い学童の安全を守るため、東京をはじめ横浜、名古屋、大阪、神戸、小倉、門司などの大都市、工業都市に住む学童を、集団で半強制的に地方へ避難させたこと。小学生が対象となった。第二次大戦中の学童疎開を言うことが多い。

英霊

死者、特に戦死者の霊を敬つていうことば。

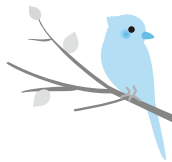
ねんねこ

幼児をおぶったとき防寒用に上からはおくる、綿が入った絆纏(はんでん)。ねんねこ絆纏とも言つ。



玉音放送

天皇の肉声(玉音)を放送すること。特に1945年8月15日正午、昭和天皇みづから太平洋戦争の終結と日本の降伏を国民に告げるために、円盤録音によって行った終戦詔書のラジオ放送のことを指す。



神戸の大空襲

堺市 竹下 貴美子(75歳)

警戒警報、近所の警防団の人が、メガホンで言って回られる声に、幼い私は震えながらラジオのスイッチを入れ、防空壕(家の板の間にあった)のふたを開ける。色々と準備をしていた父は会社に行き、祖母と母、私と弟は祖母に手を引かれ近くの学校に避難しに行くが、空からの焼夷弾が雨の様に降る中逃げる事に必死になり、足に合わない大きな靴は脱げ、地面は油であちこちが火の海、祖母は海の方に私たちを連れて逃げた。川沿いでは、艦載機に打たれ亡くなられた人がおられた。私たちは漁師の人の小屋に逃げ込み、朝になるのを待った。黒い雨が降り家にたどりついた時は焼け野原、水道管からは水がふきだし、煙があちこちから上がっていた。食べる物も充分になく、近くで雑炊の売店があると聞けば、小さな私(5歳)も一人前に並び順番を待ったが、自分の前で売り切れになり、空き腹をかかえ祖母と帰った。

食事と言えば、さつまいも、コーリヤン、むぎ等の入ったご飯、米粒等あまりなく、パサパサのご飯、なかなか食べる事が出来ない、父に怒られ、それを見ていた祖母は可哀相に思いついてくれたが祖母もしかれ、私は泣きながら食べたのを思い出します。戦後60年以上過ぎた今ではとも考えられない事ですが、TVのニュースで外国の子ども達が茶碗を抱えながら食べている姿を見ると、ふとその頃のことを頭を過ります。もうあのような戦争は絶対にはいけないと思います。語り継ぐ人も高齢者になり、薄れていくのが怖くなります。

飽食の時に育っている人には考えられない事と思います。知っている限り孫達にも話していくつもりです。

私の戦争体験記

東大阪市 福島 文子(82歳)

私は引揚者です。私が生まれ育ったのは台湾台北市。終戦当時私は12歳、女学校の2年生でした。太平洋戦争中、台北市には激しい空襲もなく、それでも時々小規模な空襲警報のサイレンが鳴ると皆で怯えて庭の防空壕へ避難、息をこらして敵機の爆音の遠ざかるのを祈りました。

3月新学期に入った頃は、登校すると間もなく警報が鳴り全員下校という毎日の繰り返しで、とうとう各学校は休校、それぞれ自宅待機・疎開という状態になりました。そんなある日、忘れもしない昭和20年5月31日、台北市は大空襲に襲われました。朝10時頃、今まで経験したこともない様な腹に響く、グングンと迫ってくる大編隊のB29の襲来です。家にいた母と私、そしてうちの防空壕にとびこんで来た近所のおばさん、壕の蓋をピタリと閉じる。

そのうち爆弾が近くに落ちたのか、壕がぐらぐらゆれる、破片がとんでいるのかビシッーと不気味な音がする。頭上にはゴーゴーと飛行機の音、恐怖におののきながら身を固くして母と抱き合いひたすら祈る事しかできない。おばさんの南無阿弥陀仏となえる声がだんだん大きくなる。どの位の時間が経ったのか記憶にないが、物音が聞こえなくなりあたりが静かになったので、母が恐る恐る壕の蓋をあける。

B29はアチコチに爆弾の雨を降らせ、どこか飛び去った様だ。家は爆風でガラスが破壊、家の中は大荒れだったが幸い人命は無事、やれやれと思ったのも束の間、壕から出た母が北方にもくもくと黒煙の上るのを見て父の会社の会社の安否を懸念、すぐに見に行くといって会社に向かう。一人家に残された私の心細かったこと。

父の会社は、台北市駅と総督府を結ぶメインストリートにあった。その時、台北駅も総督府も爆撃され、その中間にある父の会社も2トン爆弾の直撃を受け、父と会社の人々が即死、幸い

防空壕
敵の攻撃から避難するために地下に造られた穴や施設。

艦載機
軍艦に積載される航空機。大日本帝国海軍では、航空母艦に搭載される航空機を艦上機と呼び、他の艦船(戦艦、巡洋艦、水上機母艦、潜水艦など)に搭載される航空機を艦載機と称していた。

コーリヤン
イネ科の穀物で、中国北部で栽培されるトウモロコシの一種。

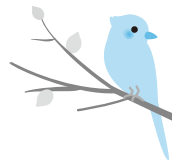
台湾台北市
日清戦争により一八九五年から日本統治が始まり、第二次世界大戦終了まで多くの日本人が住んでいました。



B29
アメリカのボーイング社が第二次世界大戦中に完成させた、長距離用爆撃機。日本本土の軍事施設を破壊するともに、都市に無差別爆撃を行った。広島と長崎に原子爆弾を投下したのも、このB29である。



総督府
植民地などで、総督が長官としてその政務を行う役所。日本も第二次大戦終結まで、台湾と朝鮮に設置していた。



遺体は跳ね飛ばされて見つかったものの、会社は跡形もなく大穴があき、朝元氣に出て行った父はむごたらしい姿となって帰ってきました。それまでほとんど空襲の被害のなかった台北の街もその日を境に人の姿がなくなりゴーストタウンとなりました。台北は1トン2トン爆弾の攻撃でしたから、逃げ惑うという経験はないものの、ゆれ動く壕の中で恐怖との戦いでした。それから終戦までの2ヶ月半、涙とくやしきで過ごしました。そして、昭和21年3月引揚、それまで父母の築いてきたすべてのものを失い、住み慣れた私の故郷との別れ、親しんだ友たちとの別れがどんなにつらかったか……。

戦争は何の罪もない弱者がいつも犠牲になるのです。

それと戦後日本に帰って来てから非常に強く感じたことは、衣食住すべてを無くした日本、悲しいばかりの廃墟を目にした時の驚きと絶望、特に食糧難のひどさは今の人たちには想像もできない事でしょう。人と人が殺し合う戦争、それによって多くの若者の血が流され、物だけでなく人の心まで失ってゆくので、私は切に切に平和を願います。

台湾往き還り

東大阪市 堀中 美知子(79歳)

戦争もいよいよ激しくなりはじめた昭和18年4月、両親、私、弟の一家4人は台湾航路の「熱河丸」の船上にあった。この数日前、客船では一番大きな「高千穂丸」が門司を出てすぐの東シナ海で、機雷に触れ一人の生存者もなく沈没した。

実は私たちもその船に乗るべくチケットまで用意していたが、父の会社の都合で次の「熱河丸」に変更され、思わぬ命拾いをした。

国民学校ではヒマの木を植え、その実の油が飛行機の燃料になると先生から聞いていたの

で一生懸命世話をした。家では母たちが待避訓練やバケツリレーをし、またある日曜日には新公田の樹の枝を伐って来て、辻々に山の様に積み上げ火を点ける。その煙幕で敵機から街を隠し守ろうと試みたりしていた。

19年11月、私たちは台北から北へ汽車で40分程かかる北投温泉へ疎開した。ある日、敵の艦載機が麓で旋回しているのを見てみると、突然一機がこちらの谷間へ向かってくるのに気づき皆一斉に「来たー」と家の中へ駆け込むと同時にバリバリーっと物凄い音がした。機銃掃射である。一瞬駄目か！と思ったが、ここでも命拾いをし、ほっとした。

「やーらばラバウルよ」の歌が流行りだすと父は「負けるな」と言い外では言わないよう念を押した。そして、間もなく玉音放送があり大人は泣いていたが、私はこれで本土決戦はなくなったと思いうれしかった。

年が明けて早々に引き揚げが本決まりとなり、父が北投地区千人の隊長に推されてしまった。持つて帰れるのは一人行李2個と現金千円。その千円を用意できない人には余分に有る人から集めて、父は全員持つて帰れるようにした。途中の荷物検査で我が家は父がその場に居なくても、荷解き荷造りが時間内に出来るようにと、行李は2個に減らした。その6個減が後に母の愚痴の種になろうとは。

帰り着いた故郷神戸は焼野原。家はなく、36歳と29歳の若い両親の新たな苦勞のはじまりである。

時に21年3月末、4月の新学期に間に合うように父は、神戸の垂水に住まいを見つけ、私は6年生、弟は4年生に進級させてくれた。

翌22年4月からは、6・3・3制が施行され、国民学校は小学校に、女学校・中学校は新制中学校、新制高等学校(いずれも男女共学)となり現在に至っている。



機銃掃射
きじゅうそうしゃ
機関銃の銃口を動かしながら、敵をなぎ払うように射撃すること。

行李
こつり
竹や柳、籐などで編んでつくられた葛籠(つづらかご)の一種。旅行用に使った荷物入れ。衣類などを収納するのにも使われた。



戦争体験

柏原市 T・H(78歳)

わたしは昭和11年、大阪市大正区で生まれました。生まれた時にはすでに戦争は始まっていましたが、まだ当時は穏やかで、世の中がどんな風になっているのか知らずにいました。あんなに優しく子煩悩だった父が突然いなくなり、南方の方へ行ったとの返事。どこへ何しにいったのかなど、母に聞けるような雰囲気でないことは、なんとなく判りました。その頃、灯火管制、竹やり訓練、防火訓練なども行われたしました。小さな子達も原っぱへ行ってコークス拾い等を手伝っていました。生活に必要なあらゆる物が不足していました。月に1度か2度開く大衆食堂で、おかゆというより重湯に団子が入っていて米粒は数えるほどの少ない物でも行列が出来て何時間も並んで買いました。昭和18年国民学校入学前、叔母たちが、店に早々から並んで鉛筆、ノート、クレヨン、画用紙とか消しゴム、色鉛筆など、学用品は不自由しないで済むほど揃えてくれました。せっかく苦勞して買いそろえてくれた文房具も使わずに焼けてしまいました。なにもかもナイナイづくしで、母はいかにして生活をしていこうかと大変だったと思います。

昭和19年、疎開という言葉を知りました。3、6年生まで、田舎に親類のある者はそこに縁故疎開を、親類のない者は集団疎開といって地方の方へ疎開しました。集団疎開の方は食糧難や家族恋しさ、ふるさと恋しさで苦しい思いをされたようでした。他にも荷物疎開というのもありました。使用しない衣服とか寝具などを縁故疎開して行きました。

昭和17年、20年の終戦まで、学徒動員といって当時の中学生(男子)や女学生たちが勉学のかたわら、と言ってもほとんど勉強のほうは中止状態で、作業をして行きました。戦況が深刻化するにつれ、昭和19年に学徒勤労令が公布され、中学生以上の生徒は軍関係の工場で作業をしました。防空壕掘りとか、弾薬を作ったり、紙風船爆弾を作ったり、落下傘を縫ったりし

たとも聞きました。

昭和20年3月13日の深夜、大阪大空襲がありました。B29が20機から30機くらいの編隊を組んで絨毯を敷いたように次から次へと焼夷弾を落とし、空から火が雨あられと降ってきました。空襲警報発令で防空壕に入ったけれど、すぐに入口にも火が見えたので防空壕を飛び出しました。どこをどう走っていたのか、何時間さまよっていたのかわかりません。あたり一面が火の壁で、まるで閉じ込められた状態です。どこへ逃げてまわっても火の壁に追いかけられどおしでした。熱いとか怖いとも思いませんでした。感覚とか感情とかは、もうマヒしていったのでしょうか。ただただ火から逃れようと必死だったので、母の手を離さないよう無我夢中に握り締めて、ついて行きました。逃げ回っている間に、誰からともなく北恩加島国民学校へ逃げろということを知り、学校へ行きました。行けば大講堂もすでに満杯で、大勢の負傷者が横たわっていたり、うめき声あがったりの修羅場でした。

夜も明け出し、父の妹である叔母の家を探しに行きました。幸いなことに叔母の家は焼けずに済み、そのまましばらく叔母の家で厄介になりました。3、4日が過ぎて、自分たちの家の焼け跡を見に行きましたが、何一つ残っておらず、まだブスブスと燃えて煙が所々で立っていました。水道管も壊れて水が流れ出ていました。茶碗や皿、湯のみなどの瀬戸物類は粉々に、ガラス製品は熱で溶けてアメ状になり地面にくっついていました。

その後母の実家の三重県に帰ることになるのですが、大正区から近鉄上六まで徒歩で帰りました。人通りも途絶え、まったくの焼け野原です。大正区、西区、南区、港区なども大きな被害を受けました。電柱が黒こげになり、電線が切れてぶら下がっているのは、所々あちこちで見受けられ、焼け残ったものの屋根は落ち、壁は抜け、です。防空壕の入口付近で、戦鬨帽をかぶり足にはゲートルを巻いた男性や、防空頭巾をかぶり、今でいう作業衣の様な格好をなさった女性の、黒こげで炭のようになった姿を見たり、まだ新しいムシロを被せられてはいるのですが手足がのぞいていたり、周囲をテントで囲ってあったりした死体も目にしま

コークス
石炭を乾留(蒸し焼き)してつくられる燃料のこと。

学徒勤労令
第二次世界大戦末期、深刻な労働力不足を補うために、中等学校以上の生徒や学生が軍需産業や食料生産に動員されたこと。

焼夷弾
敵の建造物や陣地などを焼き払うために使用する、爆弾や砲弾。中に入っている焼夷剤が燃焼することで、対象物を火災に追い込むのが目的。木造の日本家屋を効率よく焼き払うために使われた。

ゲートル
歩行を楽にするため、ズボンの裾を押さえ込み、足首から膝まで覆うものこと。



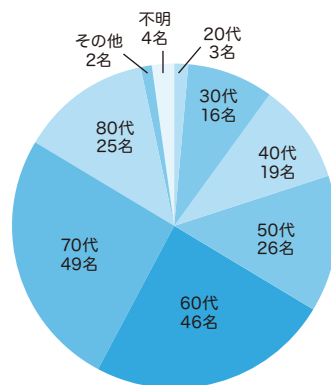
作業衣
元は寺院の僧侶(修行僧)が作業着として着用していた衣服で、作業と呼ばれる日常の労働作業(薪割り、掃除、畑仕事など)を行う際に作業着として着ていたとされる。

私の戦争体験・第35集 アンケートまとめ

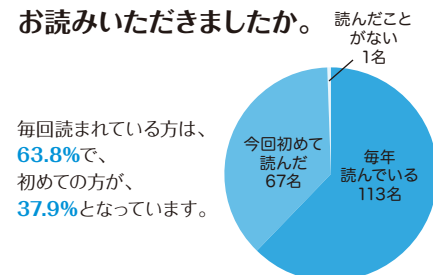
「私の戦争体験・第35集」にいただいたアンケートを集約しました。

配布週：2013年8月5日～
アンケート回収枚数：190枚

アンケートの提出者は、190名となっています。
その内、63.2%の方は60代以上
(38.9%が70代以上)の方から寄せられています。

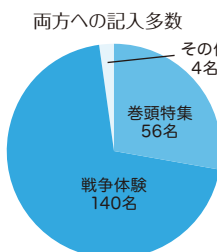


「私の戦争体験」を
お読みいただきましたか。



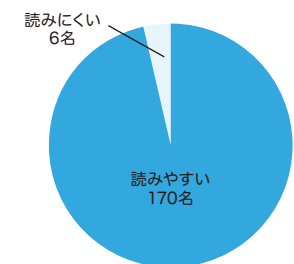
毎回読まれている方は、
63.8%で、
初めての方が、
37.9%となっています。

第35集を読まれて一番心に残ったのは。



- 湧き立っている憲法改正論、戦争体験者が少なくなった要因もあるのでは。
- 過去に憲法9条、96条を新聞である程度は理解していたが、内容をじっくり読んだのは初めてである。
- 自分には想像する事しかできないが、非現実的で、その中でも本当に体験された方の言葉に重みがあるから。
- 戦争体験、大阪市内が焼きただれた町を歩き、黒焦げの遺体の列を避けて通った事を思い出します。

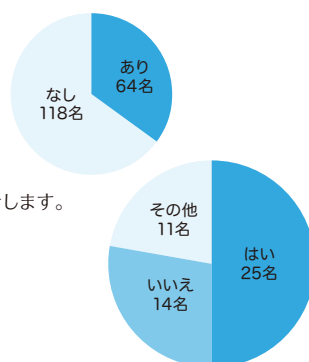
今年の「私の戦争体験」は読みやすかったですか。



- もっともっと、みんなに伝えたい思いが感じられました。
- わかりやすい文面でした。でも実際に、目の前で聞いてみたいです。
- いずれも肩を張ったところがなく、素直な自分の体験もしくは直接聞いた体験記だから。
- 言葉の説明などが下にかいてあって読みやすかった。

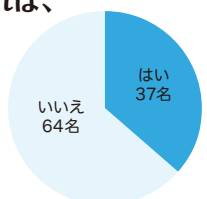
あなたの戦争体験はありますか。

あるとお答えいただいた方にお聞きます。
戦争体験を寄稿して
いただけますか？
戦争体験を寄稿できる方
(紹介含む)が25名おられました。

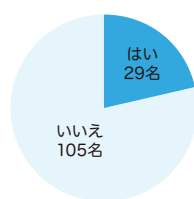


戦争体験者は、高齢となり自分で書かれるのは、
困難な方も多いと聞きます。
あなたは、そのみなさんの戦争体験
を聞いて、原稿を書く
ボランティアがあれば、
参加したいと
思いますか？

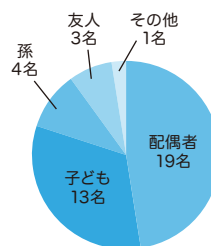
聞き取りボランティアが
37名おられました。



あなたのほかに
「私の戦争体験」を
読まれた方は
おられますか？



それは
どなたですか？



- 17～8歳で赤紙がきて兵隊に行くなんてかわいそう。家族や友だちが死んで行くのを見るのはつらい。
- 食べるものはもちろんお菓子もないなか、自分と同じくらいの子供たち(小3)がおなかをすかせていたなんて…今は好きなものが食べられるからうれしい。戦争はいやだ。
- 感想を書いた同じ日に祖母から、戦争の話の話を聞きました。その日まで住んでいた家が目の前で焼けるのを見るのは、私も想像もつかないほどショックだったのではと思います。

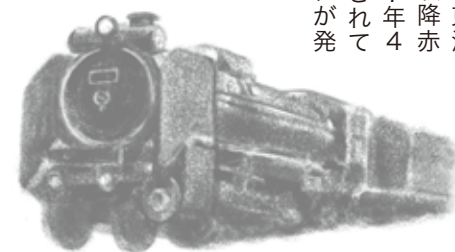
「私の戦争体験」<35集>をお読みになってのご感想をお聞かせください。

- 私は、戦時中の昭和20年4月に国民学校に入学した75歳の老女です。戦争の苦しさ、恐ろしさを記憶にある年頃は、私の世代が最後だと思います。この文章を書かれた方々は、戦時下は青春時代ですから、良く鮮烈に表現していると思いました。書かれた方が生存している限り、悲惨な事を語り続けてほしいと思います。
- とても辛い事を、語ってくださってありがとうございます。もう身内に戦争の話をしてくれる者はいなくなり、生前よりあまり語りたくないようでした。今となって、子どもにも知って欲しいし、私ももっと知りたいと思う様になりました。息子はまだ4歳。もっと実体験をお聞きするチャンスがなくなります。この冊子は、残しておきたいと思います。
- 何十年経っても、鮮明に覚えてられるんですね。それだけ、辛い、怖い、むもじい、悲しい思いをされたのです。読んでいて、体験はしていませんが、涙がポロポロ。二度とこんな悲惨な思いをさせてはいけなと思います。語り続けることの大切さを痛感しました。



した。
国鉄湊町の駅では列車が標的になったのか、橋の上で市電は電線が切れて窓ガラスもな
く、ただの箱状になり、高架が直径1〜2メートルほど抜け落ちて下の列車が丸見えになっ
ていました。やつの思いで近鉄上六駅に着き、まわりを見渡したら、建物らしい建物はほ
とんどが焼けて、大丸百貨店の建物だけが見えました。
昭和20年という年は、本当に変動の年でした。白い服は空からの標的にされやすいから着
ないほうがいいと聞かされたり、ある時の下校途中に、友と峠道の頂上に差し掛かった時、
急に爆音がして慌てて池の堤防の溝に身を伏せたりしていたことを覚えています。その頃
アジア救済連盟からの物資を1、2回受けたことがありますが、とても食べられたものでは
ありませんでした。いくら食糧不足でもあれはひどい物でした。何時間炊いても柔らかくな
らないジャガイモや腐ってジュークジュクになった悪臭のするサツマイモです。テントは
レインコートに、毛布も洗い直して仕立て直しをして手を加えながら利用しました。
終戦をむかえ、教科書を墨で塗りつぶしたり、式の度に聞かされていた教育勅語とか両
陛下の写真が飾られていた奉安殿などもなくなり、学校も学科もだいぶんと変わりました。
進学したくてもそれは叶わず、就職するにも片親というだけで差別を受け、私の人生は一体
なんなんだったのだろうと思います。犠牲になるのは女、子どもです。もう私のような経
験は、誰にもさせたくはない。戦争はどんなことがあってもしないでください。
いま、政治に携わっている方達へ。未来ある子供を犠牲にしないでください。子ども達
皆、幸せに暮らす権利があるのです。どうか子ども達の幸せを守ってやってください。

奉安殿
第二次大戦中まで、日本の各学校で天皇
と皇后の写真(御真影)と教育勅語を納
めていた建物。



国鉄
政府が100%出資して国家が保有ま
たは経営する鉄道事業。1949年6月
1日に発足したが、東海
道新幹線の開業以降赤
字に伴い、1987年4
月1日に民営化されて
JRグループ7社が発
足した。